



ISSN 0285-130X

旬刊

5. 15. 25日発行

1部200円

広島県医師会速報の代金
(200円)は県医師会費に含
まれています。

第1590号

主な目次

○核兵器廃絶を阻むもの…(森 一久)	1頁	○広島県医師協同組合情報…	22頁
○第十五回・第十六回常任理事会記事…	4頁	○社保の窓…	23頁
○第八回たばこから子供を守る医師と教師と親の会…(岩森 茂)	9頁	○医師国保の菜…	28頁
○県内のデイ・ケアの現況と適応疾患についての私見…(畑野栄治)	12頁	○地区医師会だより(尾道市、東広島地区)…	29頁
○おしらせ事項…	17頁	○書評 野間祐輔著『呉家のひとびと』…(中嶋伸一郎)	31頁
		○広島医芸ニュース(吉原昌子、渡辺晋)…	32頁

核兵器廃絶を阻むもの

日本原子力産業会議副会長 森

一 久

(IPPNW 一九九六年六月 広島)

△核兵器の出現とその背景▽

第二次大戦では、日本・ドイツの軍国主義者による従来の戦争道徳を完全に無視した戦術がきっかけとなって、双方とも人間性への配慮も何もない手段を選ばぬ戦いにのめり込んでいった。その最も悲惨な攻撃は、無差別に大衆の大量殺戮を目的とする、都市への軍事攻撃であった。日独側からの数多くの非人道的行為は周知の通りだが、大戦の最後の一年は、連合軍側からも同様な攻撃が、殆ど無防備状態になった日独の各都市に対して繰り返された。最も顕著な例は、ドイツのドレスデンと日本の首都東京に対するもので、いずれも数百の爆撃機の編隊が、先ず人口密集地の周辺に焼夷弾等の雨を降らせて住民の退路を絶ち、次

いで中心部を集中的に爆撃し、一夜にして死者十万人を越えるという、広島・長崎に匹敵する人数の大きな犠牲者を生んだ。このように、核兵器をまたずとも、在来兵器によってさえ、非戦闘員の大量殺戮は可能である。

核兵器は、このような状況の中で生まれただけに、最初の投下(広島・長崎)の準備段階から、非戦闘員の大量殺傷が第一目的とされた。この事は、ここ数年來公開された米国の公文書からも、明らかにされている。すなわち一九四五年四月二十七日に開催された第一回原爆投下目標選定委員会では、原爆が最大の効果を上げ、日本に可能な限り大きな影響を与えることが検討の目的とされ、日本への投下目標として「直径三マイル以内

に人口密集地帯がある大都市部」を選ぶことが合意された。また目標地は通常爆弾で損傷を受けていない都市で、原爆の爆風が最大の被害を与える地形であるべきであるとされた。(爆発高度についても、殺傷能力が最も効果的である高度が選択された。)そのため既に皇居以外は爆撃し尽くされ燃え尽きている東京は除外され、最終的には、広島、小倉、新潟、長崎が候補地として選定された。

核兵器の違法性を論じる時、兵器そのものの特質の問題と、その使用方法の非人道性との二つの問題が含まれている事に注意しなければならぬ。

混乱の極にあったあの凄惨な大戦の末期、連合国の指導者は、一般大衆の無差別大量殺戮という手段が、果して民主国家ならぬ独裁国家の指導者に対して、降伏に追い込む最も有効な手段と考えていたのであらうか。(そして、今もそう考えているのであらうか。)この点すなわち、独裁者というものが、果して自国民の犠牲者の多さにそれ

ほどショックを受けるものか、大いに疑問であろう。百歩を譲って若しそうだとすると、現述のように通常兵器で無差別大量殺傷は十分可能である。ともかく、このポイントこそ、二つの原爆が果して戦争終結を早めたのか、さらに核兵器こそ戦争抑止の有効手段なのか、といった議論の根幹にある最も重要な論点なのである。

△戦後世界の秩序を保持したもの▽

第二次大戦後、日独の軍事指導者たちは、連合国による国際裁判で断罪された。それらの罪状の最大なものは、非戦闘員ないし投降者に対する無差別・無事由の殺戮・虐待であり、その判決によって日本でも千人以上が処刑された。もしこれを契機にして、戦後世界が「非戦闘員の保護」ということを最低限の「戦争道徳」として国際的に再確認し、これを足掛かりに世界秩序の再構築に向かつていけば、それが最も自然な流れであったはずであり、又膨大な数の犠牲者にせめて報いる所でもあったろう。

しかしながら、戦後の世界はそういう当然の道を歩まなかった。大戦の結果として大国の植民地のほとんど全てが独立し、核兵器国際管理の交渉が決裂するとともに、イデオロギー間の対立が尖鋭化し、戦後僅か数年にしていわゆる冷戦時代が始まる。その走りが朝鮮戦争、これこそ文字通りの何のルールもない、同じ国民同士の無差別の殺し

合いとなった。次いでベトナム戦争、ここでも相手国民の大量殺傷によって降伏させようとする作戦がとられたが、これは成功しなかった。

このようにして世界の人々は、「戦争となれば一般大衆が(意図的にでも)犠牲になることは止むを得ない」と思い込まされているように思われる。このような雰囲気のもとに起っている事態は、空恐ろしいものがある。例えばソ連解体後のユーゴのような、民族殺し合いの戦争が続発することとなってしまった。

世界がこのような悪夢から抜け出す道は只一つ、先ず手始めに、一般大衆の無差別かつ無事由の殺傷こそ「最大の悪」とする、明確な国際合意を更めて確立することであろう。……もしそれが出来れば、世界人類の人間性はやっと回復の軌道に立ち戻り、最終的には戦争そのものの根絶さえも、決して不可能でないと思う。

△核兵器廃絶への道、共感招くアビールを▽

核兵器は、不可避的に一般大衆を巻き添えにする兵器である。最初の節で述べたように、在来兵器でも、あるいは軍刀でさえも、一般大衆を犠牲にできるし、その悲しい先例もある。核兵器の最大の「悪」は大衆を巻き添えにするという、この点にある。

この五十年、大国が蓄積した何万発の核兵器が一発も使われずにすんだことには、広島・長崎の体験を世界に発信し続けたことが、大きな役割を

果たしたことは言うまでもない。しかしながらその訴えは、放射線障害に重点がおかれたため、被爆者に過剰のストレスを与えたり、また一種の間違った差別感を生んだばかりでなく、外部の人々に対しては、その内容に対する誤解ひいては不信感さえ生じていることに注意しなければならぬ。一つだけ例を挙げれば、毎年の平和記念式典の際「この一年亡くなられた五千人が記念塔に合祀されました」というニュースが伝えられると、

(核兵器否定の立場の人を含め)外国人や医学者からその意味についてよく疑問を呈される。元来、放射線の影響については(直接或いは大量のものを除き)、確定的なことは証明しがたいだけに、放射線による被害を強調しようとするれば、どうしても不明確なことを断定的に述べる結果になり、それが他の戦争犠牲者等に(同情はしながらも)一種の違和感を抱かせ、協力の雰囲気も醸成できずにきた一因となったと思われる。たしかに広島・長崎が特別かつ甚大な被害を受けたのであるが、そのアビールの中に、もし特権や独善の匂いがあるとすれば、核兵器廃絶ということをして、国内ひいては世界の合意とすることは到底困難になるであろう。

昨年のNPT(核不拡散条約)無期限延長はいうまでもなく、CTBT(包括的核実験禁止条約)も核兵器廃絶への展望に繋がるものではなく、むしろ世界の潮流は、「世に戦争あるかぎり」、「世に悪者いるかぎり」、「世に戦争あるかぎり」、「世に悪者いるかぎり」、五大国による核兵器保持は「必要悪」と考えるという方向に、濤々とし

て固まりつつあるように思われる。我々が核兵器廃絶を願う、本当の意味はなんなのか、今こそ真剣に考えるべき秋ではないか。

〔付記〕

核兵器や平和利用の基盤をなす原子核科学の発見は、百年前のX線の発見にはじまるが、それは、それまで不変と信じられていた物質(元素)が相互に変換しうることで、物質が消滅すればエネルギーに変わる事を予言・実証し、さらには時間・空間の概念の変革さえ伴うという、五百年前の地動説以来の、いやそれ以上の人知の大飛躍であった。

地動説が出現した時のことを振り返ってみると、あのとき人間の宗教観や世界観は根本から覆され、宗教裁判などという混乱の中からルネッサンスという人間精神の大革新運動などを経てはじめて、人類は自信をもって「近代科学文明」の創造・発展に取り組むことができたものであった。

原子核科学の出現は人類最悪の大戦争の最中であつた。それだけに地動説が登場した時のような人間精神の浄化や止揚を経ることもなく、一気に核兵器競争へ、さらに平和利用へと突き進んできた。

最近のいろんな論争を聞いていると、かのガリレオの「それでも地球は動く」という眩きが、耳元に聞こえてくるような気持ちを感じえない。

(本原稿は一九九六年六月二十九日のIPPNWの講演内容に若干の整理、追記をしたものである。)

平成八年度

各種学会賞について

広島医学会賞

広島医学四十八巻五号より四十九巻七号までに掲載された論文で、受賞に適すると思われる論文について、会員各位よりの推せんをお願いします。ハガキにて、該当論文の題名、著者名、掲載号をお知らせ下さい。

槇殿賞

会員の研究業績で受賞に適すると思われるものがありましたら、別刷または研究概要を添えてご推せん下さい。『広島医学』以外の雑誌に発表されたものでも結構です。但し、研究機関でされたものは除きます。

(何れも推せん者の氏名を明記して下さい)

広島臨床外科医学会賞

一、既に発表された論文別刷

(但し、平成五年九月以降に発表されたもの)

二、広島大学外科教室の教授又は広島外科学会会長の推せん書

広島臨床外科医学会奨学金

一、現在継続中の研究ならびに新しく始められる研究の概要(一、〇〇〇〇字以内)

二、広島大学外科教室の教授又は広島外科学会会長の推せん書

締切…共に九月十四日(必着)

宛先…〒733 広島市西区観音本町一丁目一番一号

広島県医師会内 広島医学会会頭 宛

平成8年9月3日

日本原力産業会議

副 会 長 森 一 久 殿

I P P N W 日本支部
事務局 大木佐智代

拝啓 秋の気配が感じられるこの頃でございますが、先生にはご健勝で
お過ごしのこととお慶び申し上げます。

6月には広島県医師会でご講演頂きありがとうございました。

また、先日はご多忙でいらっしゃるにもかかわらず、広島県医師会速報
I P P N W コーナーへご寄稿頂き誠にありがとうございました。それに、
わたくし共の不手際で録音できておりませず、大変失礼を申し上げます
た。

広島県医師会速報9月5日号をご送付申し上げます。ご査収下さいませ。
広島にお越しの節は、ぜひ当医師会へお立ち寄りいただけましたら幸甚
でございます。

今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

敬 具

<核兵器の出現とその背景>

第二次大戦では、日本・ドイツの軍国主義者による従来の戦争道徳を完全に無視した戦術がきっかけとなって、双方とも人間性への配慮も何もない手段を選ばぬ戦いにのめり込んでいった。その最も悲惨な攻撃は、無差別に大衆の大量殺戮を目的とする、都市への軍事攻撃であった。日独側からの数多くの非人道的行為は周知の通りだが、大戦の最後の一年は、連合軍側からも同様な攻撃が、殆ど無防備状態になった日独の各都市に対して繰り返された。最も顕著な例は、ドイツのドレスデンと日本の首都東京に対するもので、いずれも数百の爆撃機の編隊が、先ず人口密集地の周辺に焼夷弾等の雨を降らせて住民の退路を絶ち、次いで中心部を集中的に爆撃し、一夜にして死者十万人を越えるという、広島・長崎に匹敵する人数の大きな犠牲者を生んだ。このように、核兵器をまたずとも、在来兵器によってさえ、非戦闘員の大量殺戮は可能である。

核兵器は、このような状況の中で生まれただけに、最初の投下(広島・長崎)の準備段階から、非戦闘員の大量殺傷が第一目的とされた。この事は、ここ数年来公開された米国の公文書からも、明らかになっている。すなわち1945年4月27日に開催された第1回原爆投下目標選定委員会では、原爆が最大の効果を上げ、日本に可能な限り大きな影響を与えることが検討の目的とされ、日本への投下目標として「直径3マイル以内に人口密集地帯がある大都市部」を選ぶことが合意された。また目標地は通常爆弾で損傷を受けていない都市で、原爆の爆風が最大の被害を与える地形であるべきであるとされた。(爆発高度についても、殺傷能力が最も効果的である高度が選択された。)そのため既に皇居以外は爆撃し尽くされ燃え尽きている東京は除外され、最終的には、広島、小倉、新潟、長崎が候補地として選定された。

核兵器の違法性を論じる時、兵器そのものの特質の問題と、その使用方法の非人道性との二つの問題が含まれている事に注意しなければならない。

混乱の極にあったあの凄惨な大戦の末期、連合国の指導者は、一般大衆の無差別大量殺戮という手段が、果して民主国家ならぬ独裁国家の指導者に対して、降伏に追い込む最も有効な手段と考えていたのであろうか。(そして、今もそう考えているのであろうか。)この点すなわ

ち、独裁者というものが、果して自国民の犠牲者の多さにそれほどショックを受けるものか、大いに疑問であろう。百歩を譲って若しそうだとすると、前述のように通常兵器で無差別大量殺傷は十分可能である。ともかく、このポイントこそ、二つの原爆が果して戦争終結を早めたのか、さらに核兵器こそ戦争抑止の有効手段なのか、といった議論の根幹にある最も重要な論点なのである。

<戦後世界の秩序を保持したもの>

第二次大戦後、日独の軍事指導者たちは、連合国による国際裁判で断罪された。それらの罪状の最大のものは、非戦闘員ないし投降者に対する無差別・無事由の殺戮・虐待であり、その判決によって日本でも千人以上が処刑された。もしこれを契機にして、戦後世界が「非戦闘員の保護」ということを最低限の「戦争道徳」として国際的に再確認し、これを足掛かりに世界秩序の再構築に向かっているならば、それが最も自然な流れであったはずであり、又膨大な数の犠牲者にせめて報いる所以でもあったろう。

しかしながら、戦後の世界はそういう当然の道を歩まなかった。大戦の結果として大国の植民地のほとんど全てが独立し、核兵器国際管理の交渉が決裂するとともに、イデオロギー間の対立が尖鋭化し、戦後僅か数年にしていわゆる冷戦時代が始まる。その走りが朝鮮戦争、これこそ文字通り何のルールもない、同じ国民同士の無差別の殺し合いとなった。次いでベトナム戦争、ここでも相手国民の大量殺傷によって降伏させようとする作戦がとられたが、これは成功しなかった。

このようにして世界の人々は、「戦争となれば一般大衆が(意図的にでも)犠牲になることは止むを得ない」と思い込まされているように思われる。このような雰囲気のもたらしめている事態は、空恐ろしいものがある。例えばソ連解体後のユーゴのような、民族殺し合いの戦争が続発することとなってしまった。

世界がこのような悪夢から抜け出す道は只一つ、先ず手始めに、一般大衆の無差別かつ無事由の殺傷こそ「最大の悪」とする、明確な国際合意を更めて確立することであろう。・・・もしそれが出来れば、世界人類の人間性はやっと回復の軌道に立ち戻り、最終的には戦争そのものの根絶さえも、決して不可能でないと思う。

<核兵器廃絶への道、共感招くアピールを>

核兵器は、不可避免的に一般大衆を巻き添えにする兵器である。最初の節で述べたように、在来兵器でも、あるいは軍刀でさえも、一般大衆を犠牲にできるし、その悲しい先例もある。核兵器の最大の「悪」は、「必ず」大衆を巻き添えにするという、この点にある。

この五十年、大国が蓄積した何万発の核兵器が一発も使われずにすんだことには、広島・長崎の体験を世界に発信し続けたことが、大きな役割を果たしたことは言うまでもない。しかしながらその訴えは、放射線障害に重点がおかれたため、被爆者に過剰のストレスを与えたり、また一種の間違った差別感を生んだばかりでなく、外部の人々に対しては、その内容に対する誤解ひいては不信感さえ生じていることに注意しなければならない。一つだけ例を挙げれば、毎年、平和記念式典の際「この一年亡くなられた五千人が記念塔に合祀されました」というニュースが伝えられると、(核兵器否定の立場の人を含め)外国人や医学者からその意味についてよく疑問を呈される。元来、放射線の影響については(直後或いは大量のものを除き)、確定的なことは証明しがたいだけに、放射線による被害を強調しようとすれば、どうしても不明確なことを断定的に述べる結果になり、それが他の戦争犠牲者等に(同情はしながらも)一種の違和感を抱かせ、協力の雰囲気も醸成できずにきた一因となったと思われる。たしかに広島・長崎が特別かつ甚大な被害を受けたのであるが、そのアピールの中に、もし特権や独善の匂いがあるとするならば、核兵器廃絶ということを、国内ひいては世界の合意とすることは到底困難になるであろう。

昨年のNPT(核不拡散条約)無期限延長はいうまでもなく、CTBT(包括的核実験禁止条約)も核兵器廃絶への展望に繋がるものはなく、むしろ世界の潮流は、「世に戦争あるかぎり」、「世に悪者いるかぎり」、五大国による核兵器保持は「必要悪」と考えるという方向に、涛々として固まりつつあるように思われる。我々が核兵器廃絶を願う、本当の意味はなんなのか、今こそ真剣に考えるべき秋ではないか。

[付記]

核兵器や原子力平和利用の基盤をなす原子核科学の発見は、百年前のX線の発見にはじまるが、それは、それまで不変と信じられていた物質(元素)が相互に変換しうること、物質が消滅すればエネルギーに変わる事を予言・実証し、さらには時間・空間の概念の変革さえ伴うという、五百年前の地動説以来の、いやそれ以上の人知の大飛躍であった。

地動説が出現した時のことを振り返ってみると、あのとき人間の宗教観や世界観は根本から

覆され、宗教裁判などという混乱の中から、ルネッサンスという人間精神の大革新運動などを経てはじめて、人類は自信をもって「近代科学文明」の創造・発展に取り組むことができたものであった。

原子核科学の出現は人類最悪の大戦争の最中であつた。それだけに地動説が登場した時のような人間精神の浄化や止揚を経ることもなく、一気に核兵器競争へ、さらに平和利用へと突き進んできた。

最近のいろんな論争を聞いていると、かのガリレオの「それでも地球は動く」という呟きが、耳元に聞こえてくるような気持ちを禁じえない。

(本原稿は1996年6月29日のIPPNWの講演内容に若干の整理、追記をしたものである。)